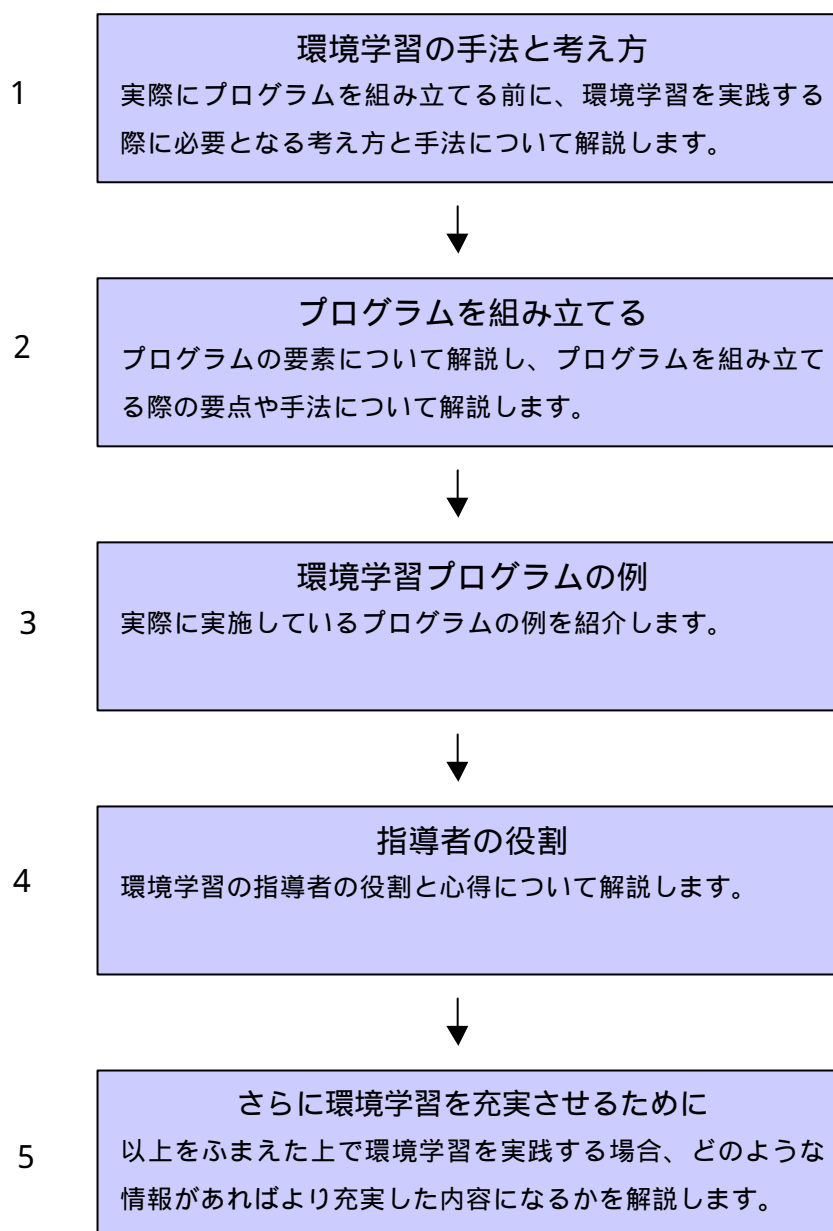


第2章 さあ、環境学習をはじめよう

この章は「実践編」ということでまとめています。この章の目的はこの本を読むみなさんがリーダーとなり、実際に環境学習を進めるためにどのようにすればよいかを書いたものです。実践に際しては、参加者に何を理解して欲しいかを考えた上で、自分でオリジナルなものを創ることが大切です。

第2章の構成は次のようになります。



1.環境学習の手法と考え方

環境学習プログラムの作り方を解説する前に、少しだけ「環境学習を実践する際に必要となる基本的な考え方」について解説します。

1)自然への感性と人間への愛情をはぐくむために

環境教育は、時間に追われ、物に囲まれ、自然への感性と人間関係を失いつつある現代社会に対し、「真の豊かさとは何か」「幸福とは何か」という人間の生き方を問い直すことにもつながる教育です。

こうした目的を持つ環境教育の基盤となるのは、自然に対する豊かな感性と、人間に対する愛情と考えられます。

しかし、自然に対する感性は本を読むだけでは育ちません。自然に対する本当の理解や配慮は、自然が命を生み出すことを感受し、その審美的な意味を理解することからはじまります。自然の中で自然を感じることを、自然や人間に関する知識を養うこと、そして、一見バラバラに見える全てのもののつながりを発見すること、これを環境教育では in about for (~中で、 ~について、 ~ための) の教育といい、環境教育を実施する際の基本的な要素として捉えています。(阿部治 1993)

(1)in about for の教育

環境 (自然) 中で行う in 学習

「in」は“in nature”または“in environment” という意味で自然環境の **中で** 実施する環境学習のことを意味します。ここでは、自然の中での野外活動を通じ、自然に対する感性をはぐくむことが大切とされています。

しかし、単に自然の中で行えばよいというわけではありません。その証拠に今まで環境破壊を推し進めてきたのは、自然環境の中で育った人々です。





知識を伝受する about 学習

「about」は、「about nature」、「about environment」、「about human life」など自然のしくみや働き、人間を取り囲む環境や人間そのものの生活など何かについて学ぶことを意味します。

ここでは、環境に関する知識や技術を習得することが大切とされています。

しかし、知識や技術を知っていればそれで全てが解決するわけではありません。

多くの人が環境問題の現状について知っているのに、未だにゴミを分別しなかったり、森林を伐採したりということが行われています。「知識」＝「行動」とは直結しないようです。

環境との関わりを実践する for 学習

「for」は、「for environment」つまり、環境（＝他者）の**ために**行動できるようになる活動を意味します。

「知識だけ知っていても何もできない」「現実に応用できない」という具合では、せっかく様々なことを学んでも何にもなりません。

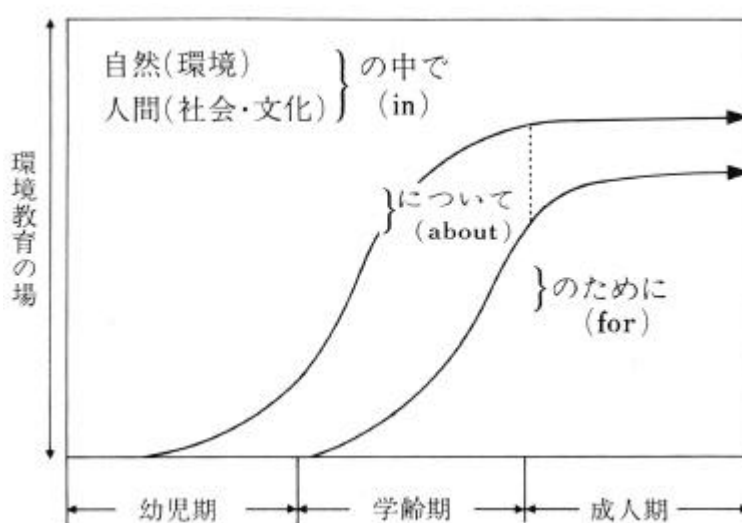
大切なのは学んだ知識が自分の生活に活かされていくこと、一見バラバラに見える知識につながりを持たせていくことです。そのための手法として、環境学習では、体験型の学習を通じて、学びのプロセスでの「どう感じたか」「何を考えたか」を大切にしています。（小野三津子 1996）



(2)成長過程に応じた学習領域

環境教育を実施する際には、常に対象のことを配慮しなければなりません。小さな子供たちに、いきなり難しい環境問題を語ってもそれには無理が生じます。また、ある程度知識のある大人を対象に単に自然の中での野外体験ばかりを実施しても、相手にとっては、何か物足りないものがあるかもしれません。大切なことは、対象に応じた活動の展開です。

下の図には、学習者の発達段階における環境教育のあり方を分かり易く示しています。



生涯学習と環境学習 (阿部 1993)

幼児期

幼児期は自然 (=自然に対する教育) の中で感性を養うことと、大人(親)の愛情につつまれ、子供同士もまれて育つこと (=人間に対する教育) が環境教育の主な活動です。それが豊かな「感性」と人間愛や信頼感を育てることにつながります。

学齢期

学齢期は学校などで自然のしくみや環境問題 (=自然) について、また人間自身や人間をとりまく文化・社会問題 (=人間) についての知識を学ぶことが、主な環境教育の活動です。

成人期

高学年(さらには成人期)になるに従い、環境 (=自然) を守り、環境問題や人間をとりまく諸問題 (=人間) を解決するための行動をとることが環境教育の中心になります。(阿部治 1992)

みなさんも環境学習のプログラムを組み立てる際には、成長過程に配慮して、プログラムを組み立てるとよいでしょう。

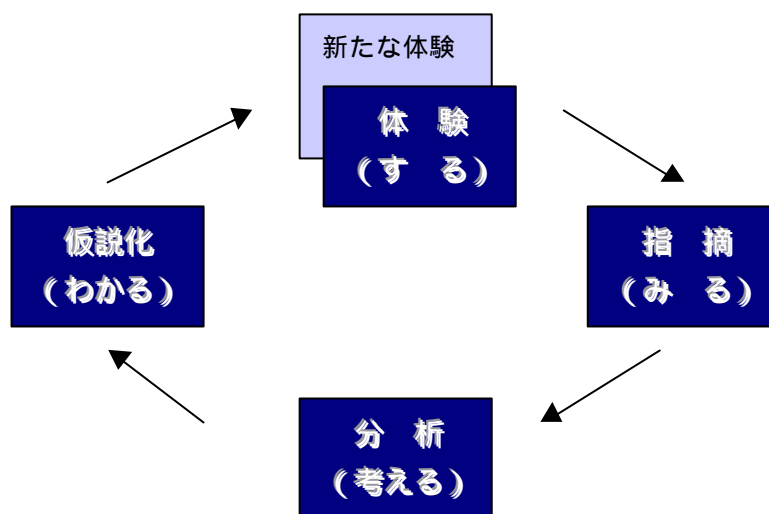
(3)体験学習とは

体験学習とは、学習する人の体験に基づく学習の手法です。実は、私たちの日常生活の中でも、意識しないで行われています。それを教育の手法として構造化、明確化したものがここでいう「体験学習」です。

体験学習とは「自分で試みる場」を意味し、主体は自分であることを象徴的に表します。

聞くことは、忘れること
見て聞くことは、記憶すること
試みることは、理解すること

体験学習は、次のように「体験」「仮説化」の課程を経て学習が進み、次の体験学習へと移行していく螺旋状の構造となっています。体験学習の循環のプロセスは、まず、何らかの体験をする（体験）ことから始まります。次いでその体験に何が起こったか、出来事や、体験のプロセス（過程）を分かち合い（指摘）します。さらに、なぜそのようになったのか、体験の原因や、原因を構成する状況などを明らかにし（分析）、最後に、体験そのものや、体験を分析する際えられた事柄などを確認し、次にはどうするか仮説を立てる（仮説化）という、体験を経験へと導くステップとなります。



2)気づきから行動へ

人間は次のように気づきから行動へのプロセスをふみます。

気づき	: 環境 = 自分の身の周りの問題に気づく それぞれの要素のつながりに気づく
理解	: 環境 = 自分の周りで起きていることを認識する。 身についた知識(知恵)となる。
評価	: 気づいたこと理解したことについて自分なりに 評価し、価値観を明確にする。 問題についてどのように行動すればよいかを自ら 考える
行動	: 気づき、理解し、考えたことを実行に移す。

この段階に応じた活動について例をあげます。

(1)気づき - 理解 - 評価 - 行動

気づき

「気づく」ということは、今まで目を向けていなかったことに目を向けることです。つまり、何かに「気持ちを向ける」ための活動です。

例えば、自然観察会でさまざまな動物や植物に気づくこと、清掃活動に参加して、たくさんのゴミが捨てられていることに気づくことなどです。昔から、大きな「気づき」を「目からウロコが落ちる」と比喻しています。





理解

「理解」するということは「気づき」から一歩進み、身の回りで起きていることについて認識することです。

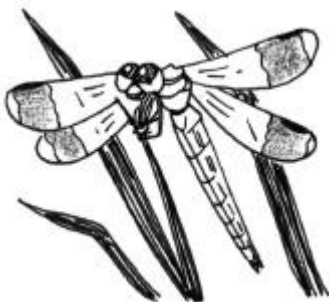
例えば、たくさん消費することで、世界の資源が少なくなることを理解する。便利な生活が、地球温暖化を引き起こすことを理解する。

情報 (断片)	知識 (体系化)	知恵 (身につく、腑に落ちる)
------------	-------------	--------------------

評価

「評価」するということは、知り得た情報や理解したことについて、主体的に考え、どうすればよいか、またはどうもしないかを判断することです。

例えば、消費が資源の減少につながると気づいたとき、無駄をなくそうと判断する。または、資源の減少にはかまわず消費し続けることを判断する。



行動

「行動」するということは、考えたことを実際に行動に移すということです。

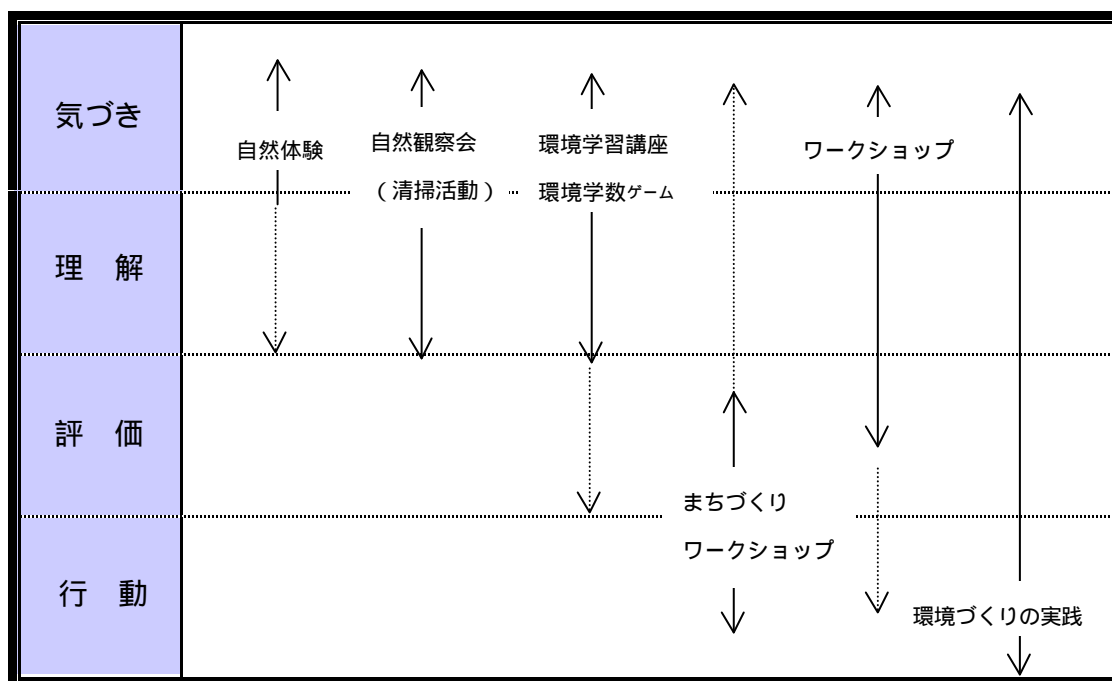
例えば、車が環境に負荷を与えるということを理解したら、自分が車を利用することを控える。市の環境に関する条例に問題があると感じたら、条例の作成に参加する。動物の生息地が少ないと感じたら、ビオトープづくりを実践する。環境学習の機会が少ないと感じたら、自分が環境学習を実践する。

(2)段階に基づく活動

環境学習へのとりくみは、個人個人によりどこからスタートしてもかまわないものです。例えば、昔からの伝統的な生活様式を続けてきた方は、既に無駄が少ない生活を送っているかもしれませんし、今更、生物の循環や森林管理について学ぶ必要はないかもしれません（そういう方に講師になってもらうとよいでしょう）。また、今まで、自然観察会や清掃活動ばかりをやってきたけれど、一步進んで地球環境では、今、自分たちが観ている動植物がどうなっているのか、またゴミ問題は日本ではどこまで深刻なのかを考える機会を設けてもよいかもしれません。森で遊び続けることが、環境への一番の気づきと考える方は、それをずっと続けていかれてもよいかもしれません。肝心なのは、「自分で何が必要かを考え、行動すること」です。

多くのことを知り、でも、今の生活を変えることも維持することもどちらもその人の判断です。ただ、自分が今、どういう位置に立っているかを理解することが環境学習であり、環境教育です。

次に具体的にどのような活動がこの4つの「気づき」「理解」「評価」「行動」にあたるのかについて例をあげます。



以上のように、大別はできますが、厳密にはどの活動がどの段階であるかを断定することはできません。

もしかすると、同じ活動をしていても、とてもよく理解して主体的判断に基づいて行動している人もいれば、全くそうでない人もいる可能性があるのです。